

家 庭

1 学習指導と評価の改善・充実

専門教科「家庭」においては、家庭の生活に関わる産業に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、生活産業の社会的な意義や役割を理解させるとともに、生活産業を取り巻く諸課題を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって解決し、生活の質の向上と社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てることを目標としている。

この目標は、専門教科「家庭」の学習が、衣食住、保育などの各分野の充実発展に役立つことや、生活産業の発展に寄与することのみでなく、生活の中での価値観の形成やライフスタイルの創造とともに、生活の質の向上を図り、広く社会の発展に貢献するものでなくてはならないことを示しており、激しく変化し続ける社会の状況を常に把握し、それに対応すべく常に新たな課題解決の方法を考え、新たな発想の中から新たな技術を開発していくことのできる能力と、その能力を実際に社会の中で生かして働こうとする態度を育成することをねらいとするものである。こうした能力や態度を育成するためには、実験・実習などによる実践的・体験的な学習が大切であり、衣食住、保育などの各分野に関する知識と技術の中にある学問に基づく理論や子どもや高齢者に重点を置いた人間の発達や心理などについて理解させるとともに、課題解決に向けて創意工夫をする経験を積み重ねさせることが必要である。

また、学習評価については、きめ細かな学習指導の充実と生徒一人一人の学習内容の確実な定着を図るため、知識や技能のみの評価など一部の観点に偏した評価が行われることのないように、観点別に評価を行うとともに、それを十分踏まえながら評定を行う必要がある。

特に家庭科においては、教科の特性上、実験や実習を重視していることから、ペーパーテストを中心としていわゆる平常点を加味した、成績付けのための評価ではなく、実験や実習の学習状況についても十分踏まえた上で評価を行う必要がある。そして、その結果を授業の改善や個に応じた指導の充実、指導計画等の改善につなげていくことが必要である。

2 「確かな学力」を育成する取組の改善・充実

専門教科の指導に当たっては、将来のスペシャリストの育成に必要な専門性の基礎・基本を一層重視し、専門分野に関する基礎的・基本的な知識、技術及び技能の定着を図るとともに、ものづくりなどの実践的・体験的な学習を通して実践力を育成することが大切である。さらに、職業資格や各種検定の取得、競技会等への挑戦など、目標を持った意欲的な学習を通して、知識、技術及び技能の習得・定着、実践力の深化を図るとともに、課題を探究し解決する力、自ら考え行動し適応していく力、コミュニケーション能力、協調性、学ぶ意欲、働く意欲、チャレンジ精神などの創造的で実践的な能力や態度を育成することが求められている。また、実践的・体験的な学習において、インターンシップなどを積極的に取り入れ、実社会や職業との関わりを通じて望ましい勤労観、職業観を育み、生活産業に従事するスペシャリストとして社会で働くことを通して社会の発展に寄与しようとする。

る「実践的な態度」を育成することが重要である。

(1) 「実践的な態度」を育成する実践事例①

文部科学省の平成26年度「消費者教育推進のための調査研究事業」研究指定校であるA高校における公民科との連携や、フードマイレージに関するワークショップ、商品開発など、授業において主体的・協働的な学習活動を取り入れた、消費者として主体的に行動できる実践的な態度を育成する実践事例を紹介する。

1 調査研究課題名

高等学校における「消費者教育推進法」の趣旨を生かした消費者教育の在り方について

2 取組内容

- ・消費者市民社会の構築の視点から消費者問題を考えさせる学習活動の実施
- ・家庭科の学校設定科目「食文化とマナー」において、地域食材の商品化を目指す授業実践の実施
- ・千歳産の大納言小豆を題材に、食品の安全性、選択、食材の高付加価値化や地域ブランドの確立などまでを視野に入れた、地産地消型の消費者教育の実施

<年間計画>

時 期	内 容
6月20日	2014年消費者教育シンポジウム（公益財団法人消費者教育支援センター主催）への出席
7月～	消費者教育（家庭科）の授業実践の開始
8月8日	消費者教育指導者養成講座（北海道教育委員会主催）で実践発表
10月3日	家庭科先進校研究訪問受け入れ（道外中等教育学校）
11月26日	学校視察訪問（道内高校）
1月～	消費者教育（地歴・公民科）の授業実践
1月27日	家庭科と地歴・公民科教員合同研修会の実施（札幌消費者協会との研究協議会） 弁護士による消費者教育の講演
1月29日	家庭科先進校（道外中等教育学校）の公開研究会への出席
2月14日	生徒対象アンケートの実施及び結果の分析
3月～	事業報告書の作成 実践のまとめ（冊子）の作成 学校HPへの掲載

3 学校設定科目「食文化とマナー」における、地域食材の商品化を目指す授業実践

(1) 消費者教育の題材の選定～商品開発に決まるまで～

- ・体系イメージマップと消費者教育関連表を参考

「着色料の抽出実験」など食生活の分野に関する学習において、消費者庁が公表した「消費者教育の体系イメージマップ～消費者力ステップアップ～」と、埼玉県教育委員会が発表した「高等学校各教科における消費者教育関連表」を参考にして、消費者教育の題材について検討したところ、現在の学習活動に「フードマイレージ」「地産地消」「フェアトレード」などを加えると、学習活動の充実が図れることが分かったので、食の分野を題材として消費者教育を深めていくこととした。

(2) 地域に対する関心を高めるために

- ・千歳市の特産物に注目

千歳市は、石狩管内第1位の生産額を誇る農業生産地帯であり、本校の消費者教育においては、千歳市の地域としての優位性を生かし、地域の特産物である「大納言小豆」を題材に、食品の安全性、食材の商品化、高付加価値化、地域ブランドの確立を目指す「地産地消型の消費者教育」を展開することで、消費者としての資質を高めていくこととした。

- ・地元食品加工場の見学

千歳市には10か所の工業団地があり、250社を超える企業が立地している。この好条件を生かし、体験的な学習の充実を図るため、岩塚製菓株式会社の千歳工場を訪問した。せんべいの焼き・味付け・包装の製造工程を見学し、担当者から直に生産現場の話を伺うことは、地域の産業に対する理解を深めるとともに、学習への興味を高めることができた。

食生活に消費生活の内容を取り入れた横断的な学習により、学習内容と実社会との関わりについて理解させる。

地域の食材を活用した商品開発という実践的・体験的な学習を通して、課題解決に向けて創意工夫する経験をさせることにより、消費者としての実践的な態度を育成する。

生活産業に関する現場見学による体験的な学習により、今後の学習への意欲を高める。

・商品研究

家庭科の専門科目「消費生活」の「商品研究」の単元を参考に、実際に社会に流通している小豆の羊羹の分析をした。味に加えて、食品の安全性、価格、表示、包装、廃棄処分、商品の評価等に関する研究を通し、商品に関する知識について学習した。

(3) 商品の考案

大納言小豆を使った商品開発をするために、個人研究からグループ研究を経て代表の商品を数点に絞り、考案した生徒がクラスでプレゼンテーションを行い、投票の結果「大納言小豆のミルクレープ」に決定した。高校生らしい豊かな発想の作品が多数見受けられた。

(4) 試作品の調理

「大納言小豆のミルクレープ」の試作品を作った。これまで生徒たちが時間をかけて考えてきた「商品」が、実際の形になることから、調理実習に取り組む姿は大変熱心なものであった。

食の安全や付加価値など消費生活に関する学習内容を踏まえた地元の食材を活用した商品の考案をする過程で、個人・グループによる主体的・協働的な学習活動を取り入れることにより、消費者として主体的に行動できる実践的な態度を育成する。

(5) 原材料表示、価格設定等

「大納言小豆のミルクレープ」を商品として送り出すために、必要な表示の作成や価格を設定するとともに、キャラクターデザインを作成した。キャラクターは「AZU太郎」に決定した。

企画・試作を経て、表示を作り、パッケージデザインを考え、カロリー計算や栄養成分計算をしていくことは、消費者がどのような商品を求めているのか、商品に関する必要な表示や情報は何かということについて考える機会となった。

(6) 指導と評価の計画

時間	学習内容	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
1	商品研究（消費者が求める商品、必要な情報について）	●消費者生活を消費者と生産者双方の立場からとらえようとしているか。	●持続可能なライフスタイルを目指して、思考を深めているか。	●原材料表示や栄養表示などを読み取り、商品選択の手掛かりとすることができるか。	●持続可能な社会の形成や生活の質を向上させる消費者支援について理解を深めているか。
2	商品開発（大納言小豆を使ったお菓子、料理）	●商品開発について意欲的な取組をしているか。	●国際社会や地球環境を視野に入れた消費行動について考えているか。	●消費者ニーズに合わせた商品について検討し、企画することができるか。	●「消費者の権利」と「消費者の責任」を理解しているか。
3	商品アピールのためのプレゼンテーション作成	●消費者の視点に立った商品の企画開発に、主体的に取り組もうとしているか。	●消費者の立場に立った商品を創造的に開発することができるか。	●計画に基づき試作品を作成し、正しく評価することができるか。	●試作品作成の目的や、それを評価・改良・変更する過程について理解しているか。
4	商品のプレゼンテーション発表、商品決定	●安全で安心できる商品づくりに向けた生産者側の取組について関心を持っているか。	●商品について、分かりやすくプレゼンテーションすることができるか。	●商品開発に必要なデザインに関する技術を身に付け、活用できるか。	●商品を取り巻く環境との関わりについて知識を身に付けているか。
5	商品の試作（調理実習）、評価・改良点の検討				
6	商品化の試行（価格設定、原材料表示、パッケージデザインなど）				
7	まとめ（消費者としての意識の向上を目指して）				

平成26年度消費者教育推進のための調査研究実施のまとめ（冊子）から抜粋



IV さまざまな連携

1 教科間（家庭科と地歴・公民科）連携～研修会の実施～

札幌消費者協会の講師派遣講座を依頼し、授業を参観しながら消費者教育の在り方について研修をしました。講座の「ゲームで学ぶフェアトレード（消費者市民社会の実践）」では、ゲームを通じて、カカオ豆のために消費者がやるべきテーマについて学びました。それは、現代の消費者が直面している課題について学び、正しく消費生活について学ぶ必要があることがわかりました。



V 生徒対象アンケート（一部抜粋）

1 高校生の調理の頻度と食品購入に関して



(2) 「実践的な態度」を育成する実践事例②

専門科目「ファッション造形基礎」の評価において、評価の観点「技能」を評価する際に、検定を活用したB高校の実践事例を紹介する。

本事例は、共通科目「家庭総合」において、全国高等学校家庭科被服製作技術検定4級を、また、専門科目「ファッション造形基礎」において、同3級の題材を製作する学習を通して、被服を計画的に製作することができる能力と実践的な態度の育成を狙っている。

全国高等学校家庭科技術検定被服製作3級を活用した指導計画を【表1】に、評価の観点「技能」の評価規準を【表2】に示す。

【表1】全国高等学校家庭科被服製作技術検定3級を活用した指導計画

単元(20時間)の目標		全国高等学校家庭科被服製作技術検定3級の題材「アウターパンツ」の製作を通して、被服製作に関する基礎的な知識と技術を習得し、被服を計画的に作成することができる能力と実践的な態度を身に付ける。		
時間	指導内容	学習活動	評価規準	指導上の留意点
1	・学習内容の確認をする。	・被服製作技術検定3級の内容について知る。		・検定題材であることを理解させる。
2	・材料の選択をさせる。	・布地の性質と扱い方、基本的な縫い方、立体構成衣服について理解する。	【知識・理解】 ・製作のために必要な基礎的・基本的な知識を身に付けている。 ＜評価方法＞ 被服製作技術検定3級(筆記)の評価規準による。	
10	・縫製(1着目)	・縫製に関する基礎的な事項を理解し、適切に縫製する。 	【技能】 ・アウターパンツを製作することができる。 ＜評価方法＞ 観察法 【思考・判断・表現】 ・次の製作手順を考えながら効率よく製作を行っている。 ＜評価方法＞ 自己評価法・製作作品	・アイロンや道具類の安全な取り扱いについて留意する。 ・立体構成をイメージできるようにする。 ・技術が未熟な生徒には見本を提示しながら個別指導を行う。また、生徒同士で教え合えるように促す。
3	・検定のための事前作業をさせる。	・2着目(検定用)の事前作業を行う。	【関心・意欲・態度】 ・検定に向け、意欲的に取り組んでいる。 ＜評価方法＞ 観察法・自己評価法	●C「努力を要する」状況と判断した生徒への手立て ・ズボンなどの下衣の実物を提示し、立体構成のイメージをふくらませる。 ○A「十分満足できる」状況と判断した生徒への手立て ・自身の理解も深められるようにCの生徒への援助を促す。
2	・検定の受験。	・検定作品を製作する。	【技能】 ・アウターパンツを製作することができる。 ＜評価方法＞ 被服製作技術検定3級(実技)の評価規準による。 (【表2】)	
2	・事後作業	・仕上げ作業を行う。(2着分) ・感想や反省を自己評価表に記入する。	【関心・意欲・態度】 ・専門的な学習について、具体的な目標を持って意欲的に取り組んでいる。 ＜評価方法＞ 観察法・自己評価法	

【表 2】評価規準

観点	評価規準「おおむね満足できる」状況（B）
材料・裁断	用布、服飾品の材質が指示通りに扱われている。 布目、縫いしろが適切である。
縫いしろ	ロックミシン・端ミシンなどで適切にしてある。
ポケット	位置・大きさが機能的である。 ポケット口の始末がしてあり、折り方がよい。 縫い方が適切で落ち着きがよい。 口止めミシンのかけ方がよい。
わき	縫い方が適切で縫いしろの倒し方がよい。
また下	縫い方が適切で縫いしろの倒し方がよい。
また上	重ね縫いがしてあり、なだらかにミシンがかけられている。 縫いしろの倒し方がよい。
ウエスト	折り幅がそろっている。 縫い方が適切で落ち着きがよい。 ひも・ゴムテープなどの通し口の始末がよい。
すそ	すその折り幅がそろい、すそ線がなだらかである。 縫い方が適切で落ち着きがよい。
できばえ	汚れ・切りきずがなく、針目・糸調子縫い糸が適切である。 ひも・ゴムテープなどの扱いが適切で落ち着きがよい。 指示通りで、できばえがよい。
時間	定めた時間内に完成させている。

(3) 「実践的な態度」を育成する実践事例③

専門科目「ファッション造形」の学習指導において、生徒が授業で製作したひとえ長着（ゆかた）を使った着装講習を取り入れたC高校の実践事例を紹介する。

本事例は「ファッション造形」において、生徒が「ファッション造形基礎」で製作したひとえ長着（ゆかた）を使った着装講習を取り入れることで、和装に関心を持つとともに、帯や小物類とのコーディネートや、着用目的と場所にふさわしい着装について考え、表現することができる実践的な態度の育成をねらいとしている。

また、ひとえ長着（ゆかた）を着用して外出した際の様子について、夏休みの課題としてレポートにまとめる学習も実施している。

本時(2時間)の目標		和服の着装に関心を持ち、着用目的と場所にふさわしい着装について考え、表現することができる実践的な態度を身に付ける。		
過程	指導内容	学習活動	評価規準	指導上の留意点
導入	・本時の学習内容の確認をする。	・本時の学習内容を知る。	【関心・意欲・態度】 ・目標を持って意欲的に取り組もうとしている。 ＜評価方法＞ 観察法・自己評価法	- うまくできていない生徒には個別に対応する。 - 常に整理、片付けをさせながら行う。 
展開	・和装の成り立ちについて説明をする。	・説明を聞きながら、実際に着付けを行っていく。	【思考・判断・表現】 ・ひとえ長着（ゆかた）の着装を通して、着用目的と場所にふさわしい着装について考え、表現できる。 ＜評価方法＞ 観察法・自己評価法	
まとめ	・着装講習を行う。	・装具の名称や取り扱いについて理解する。 ・適切な仕上げ方やたたみ方を理解する。		
	・着用したときの立ち居振る舞いについて説明する。	・和装でのマナーについて理解する。		
	・感想・反省を自己評価表に記入させる。 ・課題を提示する。	・感想・反省を自己評価表に記入する。 ・夏休み中にひとえ長着（ゆかた）を着用して外出した様子を記録する。		

「ファッション造形基礎」におけるひとえ長着（ゆかた）製作の様子

Topic

ホームプロジェクトにおける言語活動の充実 ～「知っていること・できること」をどう使うか～

◆ホームプロジェクトとは

ホームプロジェクトは、家庭科の学習を進める中で、自己の家庭生活や地域の生活と関連付けて生活上の課題を設定し、解決方法を考え、計画を立てて実践することを通して生活を科学的に探究する方法や問題解決の能力を身に付けさせる学習活動である。

ホームプロジェクトを実践することによって、家庭科の学習で習得した知識と技術を一層定着し、総合化すること、すなわち生徒が「知っていること・できること」を活用することができ、生徒の問題解決能力と実践的態度を育てることができる。

◆指導上の留意点

See 問題発見 題目設定

学習内容を各自の生活と結び付けて考えさせ、常に課題意識をもたせるようにして題目を設定させる。

Plan 計画

目標を明確にして綿密な実施計画を作成させる。

Do 実行

生徒の主体的な活動を重視し、教師が適切な指導・助言を行う。実施過程を記録させる。

See 反省・評価 発表

実施後は、反省・評価をして次の課題へつなげるとともに、成果の発表会を行う。

〈ホームプロジェクトの実践例〉（報告会での生徒の発表資料）

「効率の良い皿洗いでエコ生活」

D高等学校 1年 OO OO

【課題発見・テーマ設定】

冬場はお湯を使うことが増え、ガス代や水道代、灯油代が上がっているのを、どうすれば効率良く少ない水やお湯で皿洗いができるのかと考え、この題目を設定した。

【計画】

(1) 実態調査 (2) 問題点の把握 (3) 研究・実践活動 (4) まとめと反省・評価・今後の課題

【実施】

(1) 実態調査(1月10日)

普段通り皿洗い。

時間は15分。主にお湯を使用し、皿を1枚ずつ洗う。



(2) 問題点の把握

お湯で洗ったため、汚れはきれいに落ちたが、問題点は、1枚ずつ皿を洗っていくため、お湯を出しっ放しで大量に使うことである。

(3) 研究・実践活動(1月11日)

方法を変えて皿洗い。

時間は20分。

- ・洗い桶にお湯をためておき、洗剤で洗った食器を次々入れていく。
- ・全部洗ったら少量の水で泡を流す。
- ・油などの汚れの付いた皿は、不要な紙や布で拭き取ってから洗う。



【反省・評価】

- ・洗い桶にお湯をため、最低限、水で泡を流す方法は、お湯で流すことに比べ、皿をしつかりと洗うためには時間がかかったが、実態調査の時よりもお湯を使わずに済んだ。

【今後の課題】

- ・お湯や水の使用量を計算して数値として出し、検証したい。
- ・今回の皿洗いの取組をもっと長期間実施し、水道代やガス代の変化を見てみたい。

専門教科「家庭」の各科目の実験・実習に当たっては、ホームプロジェクトを取り入れることができる。ホームプロジェクトの実施時間数については、専門教科「家庭」における科目の授業時数の10分の2以内をこれに当てることができる。また、学校家庭クラブ活動については、「課題研究」に位置付けている。